

イチゴの栽培技術の向上を目指して

対象者 少量土壌培地耕イチゴ栽培者

【普及活動のねらい・対象】

甲賀管内では、現在 13 戸(経営体)で 15, 174 m²の少量土壌培地耕によるイチゴが栽培されています。昨年度は仮親株床や本ぽで炭疽病等の被害が多発し、経営に大きな影響を与えました。栽培経験が長い生産者が多いため、近年、集合研修は行われていない状況でしたが、「我流になっている栽培を見直したい」というベテラン農家からの要望と「基本的な栽培技術を学びたい」という新規栽培者および栽培予定者があることから、今年度は集合研修と現地巡回を組合せて栽培技術の向上を目指しました。

【普及活動の経過】

1. 集合研修の開催

開催月日	タイミング	開催場所	テーマ
6月2日	仮親株定植前	甲賀合同庁舎	炭疽病の対策と仮親株床の管理
9月3日	本ぽ定植前	甲賀合同庁舎	本ぽの適正管理
11月6日	厳寒期前	現地(甲賀いちごハウス)	厳寒期における管理について



お互いの栽培方法について情報交換し基本技術を確認する生産者



施設の管理方法についての質問に回答する普及指導員

2. 現地巡回

これら研修会の前後には、現地巡回を通じてそれぞれの研修内容の徹底に努めました。

【普及活動の成果】

3回の集合研修には毎回 10 名前後の参加者があり、活発な情報交換が行われました。特に、1 回目の研修会では病害発生の一要因として仮親株床の子苗の混みすぎを当課から指摘しました。農家にとっては、定植苗の不足を懸念するあまり予備苗を多く見込んだため子苗が混みすぎ、結果的に苗床が蒸れた環境になり農薬が付着しにくい状況を作っていたことに気付いて頂くことができました。

また、2 回目の研修会では、参加者間で苗数確保について、また、3 回目では、天敵散布や UV-B 照射による病害虫防除技術や炭酸ガス施用技術の導入、観光もぎとりを経営に取り入れている点について活発な意見交換が行われました。

今年度のイチゴは花芽分化が早く、定植後の気温が高く推移したことから、管内の早いところでは 10 月下旬から収穫が始まり、順調に収穫が進んでいます。

今後も、現地巡回や研修会を通じて栽培技術の向上を図っていきたいと考えています。

(宇野、田中)